

「クレイム申し立て」を行わない人々：

女子学生の「恋愛観」から考える若い女性のエンパワーメント

横 田 恵 子

1. はじめに

概して女子学生を含む二十歳前後の女性は、「今どきの女のこ」と大雑把にくくられ、その時代の社会・文化面の表象のようにマスコミなどに描かれるものである。特に彼女たちの消費動向や、家族や労働に関する価値観の把握は、まるでそこに日本の浮沈がかかっているような勢いでいろいろな角度から論じられる事が多い。しかし、日ごろ二十歳前後の女性たちと教育や社会運動実践の場では出会っていると、このような一括りにしたカテゴリーの付与は、ずいぶん乱暴な話なのではないかと思うようになってくる。

それでは、これら二十歳前後の若い女性たち、特に女子学生はどのようにセグメント化出来るのだろうか。最近筆者は、三つのカテゴリーに分ける事が出来るのではないかと考え始めている。そこで本稿では、若干の資料と筆者自身の体験を基に、これら三群にわたる「女のこたち」の特徴をかいつまんで描写することを試みる。さらにそこから、今どきの「女のこたち」へのエンパワーメント実践はありうるのか、という点について手がかりを探ってみたい。

2. 2000年代の女のこたち：「恋愛」の学習と実践

2-1. 前提としての「恋愛」、目標としての「恋愛」

最初に、いくつかの大学や専門学校で実際にあった場面から始めたい。そも

そも本トピックは、筆者自身のこの体験から始まっている。筆者は1998年から現在に至るまで、数校の大学でソーシャル・リサーチのクラスを担当しているのだから、初回の授業では「それぞれに普段購読している雑誌を持ち寄り、アンケート記事を選んで分析しなさい」という課題を出すことにしている。90年代後半から今に至るまで何度もこの課題を課しているうちに、女子学生たちの持ち寄り雑誌と興味を持つ記事に一定の傾向があることを感じるようになった。たとえば、心理学系学科や看護学校の場合、女子学生が持参する雑誌は、「SAY」が圧倒的なのである。都市部では、今や電車の宙吊り広告ですらあまり見かけなくなったが、80年代半ばにはよく見かけた女性誌である。対して社会学系の女子学生の場合は、この課題で女性誌を持ち寄ることは殆どない。新聞記事や「ぴあ」などの情報・カタログ誌を持参する。そして本校も含む圧倒的多数の文学部、教養学部系に所属する女子学生の場合は、判で押したように「JJ」と「25ans」となるのである。

以上に述べたエピソードが「女のコたち」の差異を物語るきっかけになるのではないか、というのが漠然とした筆者の思いであった。しかしここには、別の傾向も同時に存在する。彼女たちの殆ど全員が、選んだ雑誌にかかわらず「恋愛」「結婚」についてのアンケート記事を分析対象に選ぶ、ということである。

ここで女性誌の種類によって異なる「恋愛」の扱いについて見ておきたい⁽¹⁾。ここでは便宜上、「25ans」と「JJ」をいわゆるクラス・マガジンとして同一カテゴリーに入れて扱うことにして、「SAY」と「JJ」における「恋愛」の扱い方の違いを少し見ておきたい。日本雑誌協会によれば、2003年のそれぞれの発行部数は「SAY」が15.8万部、「JJ」は60,9万部である。大宅壮一文庫の雑誌記事タイトルカタログに「恋愛」というフリーワードを入れて両雑誌を検索すると、2004年1月から12月までの12号で、「SAY」では60件の記事がヒットし、対する「JJ」では5件であった。「SAY」の場合には連載記事やインタビューが含まれているため、それらを除いて特集記事だけに絞り込んでみたが、それでも19件が残る（表1）。

表1. SAYとJJにおける「恋愛」トピックの扱い方 (2004年1月～12月)

(出典：大宅壮一文庫雑誌記事タイトル目録)

| SAY | JJ |
|-------------------------------|---|
| 女性が考える「女らしさ」、男が求める「女らしさ」 | 「モノトーン好き」の恋愛上手：大人っぽくて清楚な白ブラウス・セクシーな黒の組み合わせに男のコはメロメロ |
| お値打ち男をつかむ女、ダメ男にはまる女 | メールに電話、たくさんしてもどんどん離れてゆく気がする。どうする？彼が遠くに行ってしまったら |
| 2人の会話でわかる「長続きするカップル」「別れるカップル」 | |
| 男の弱さをわかってあげれば恋は必ずうまくいく | クリスマスの恋 ‘04年の幸せのゆくえ |
| 何気ない一言でズバリわかる！男の本性 | |
| もし、彼女がいる男性を好きになってしまったら？ | |
| 彼の本心を確認するケンカの仕方・恋の深め方 | |
| 運命の出会いレシピ集 恋のキッカケってこんなにあるんだ！ | |
| 気づかぬうちに僕らを操ってしまう女性がいい！ | |
| 恋に発展するきっかけ、ボクらの場合 | |
| 男の人ってどうしてこうなの？を徹底解明 | |

このタイトルリストからは、「SAY」において、恋愛の規範が自分自身の視点からではなく男性から付与される一方的なカテゴリーによって規定されていることが見えてくる。その規範を注意深く学び、それに同調すれば「彼氏」が

得られる、という展開である。一方の「JJ」には、明確な方向性はないようである。

しかし、このリストだけではあまりにもバランスが悪い。特に、クラス・マガジンのサンプルとして選んだ「JJ」におけるヒット件数が少なすぎる。そこで、別のシーンから、さらにキーワードを見つけることにした。

2-2. 「女のこたち」の描く近未来

「恋愛」「結婚」というキーワードで彼女たちが展望、予測しているのは、おそらく「近い将来の私の人生」なのだろう、というのは容易に推測がつく。そこで、次に「生き方」をフリーワードにして二誌を検索した。その結果が表2である。ここでは「SAY」11件、「JJ」3件であった⁽²⁾。

「SAY」では、現在の人生は「変えるべき不満足な状態」というとらえ方がされている。そして、人生を「変える」にはお金が必要である、というメッセージを送っている。対する「JJ」は、おしゃれを中心に、自分の生活クオリティを今と同じ心地よい状態に保つことが「生き方」になっているようだ。

実際に、リサーチの演習で2004年度までに提出された学生自身によるリサーチ・クエスチョンを振り返ると、それぞれが最初に持参する雑誌の傾向と似通っているような印象がある。「SAY」を好む一群の女子学生たちは、「どうすれば「彼氏」を作ることができるのか」「理想の男性に出会うには?」といったテーマを課題として作ることが多いし、情報・カタログ誌系をベースにする女子学生たちは、「仕事で女性の側が転勤になった時、遠距離恋愛は続けられるか」、などの現実的なテーマを見つける。「JJ」などのクラス・マガジン系になると「今つきあっている「彼氏」と結婚するか」に話が及ぶことが多い。表3に、3つのグループのそれぞれの特徴をまとめてみた。もちろん、これはあくまでも筆者自身の体験の範囲に限った経験的な俯瞰図であり、印象の域を超えるものではない。しかし総じて、3つのグループの価値基盤はずいぶん異なるし、おそらくそれを手がかりに行われる日常実践としての恋愛も、ずいぶん

表2. SAYとJJにおける「女性の生き方」トピックの扱い方(2004年1月~12月)

(出典:大宅壮一文庫雑誌記事タイトル目録)

| SAY | JJ |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 嫌われてみるって大切なこと。こんなシンプルな生き方が愛される | 最近また増えています 女の子はいつもプリンセス Love |
| 一生お金に困らない16のキーワード | 家賃、仕送り、バイト、お洋服、デート・・・みんなどうしてる?はじめての |
| 一足先に夢をつかんだ女性たち:あなたの可能性セルフチェックつき | 一人暮らし、お金のこと、部屋のこと |
| 私の生き方選択肢24 | ママは何でも知っている おしゃれはもちろん、生き方も一番身近な先生です |
| 女性たちのお金の使い方、ここが絶対許せない | ボーナスがさびしくても自分への投資は忘れないけなげな自分にごほうびあげる |
| 新「わたし主義」宣言 一人暮らしを始める | |
| 新「わたし主義」宣言 自分の世界を持っている人は輝いている | |
| いまのままのわたしで本当にいいの? 人生をガラリと変えた女性8人 | |

違っているのだろう。

3. 「女のこたち」はエンパワー出来るのか

3-1. 今どきの女子学生が選ぶ恋愛の実践様式

前項では、20歳前後の女子学生たちの有り様を、依拠する価値を中心に、いささか荒っぽく三つのタイプに分類してみた。次に、それぞれのグループがどのように彼女たちの恋愛を日常実践しているのか、ということを考えてみたい。

「クレーム申し立て」を行わない人々

表3. 講読雑誌の傾向別に見る女子学生の特徴

| | 一群 | 二群 | 三群 |
|-----------------------|--|---|---|
| 購読傾向が見られる雑誌 | SAY | 情報・カタログ雑誌 | JJ、25ans |
| 学生自身が考えたりサーチ・クエスチョンの例 | SEXは、結婚を前提とした関係なら良いか。 どのような男性を「彼氏」に選ぶと良いか | 就職後、遠距離恋愛になってしまった場合は別れるべきか。 結婚後の姓は同姓にするべきか。 | 恋愛対象の男性と結婚対象の男性に求める性質の違いは何か。 今つきあっている男性との結婚を考えているか。 |
| 「恋愛」の位置づけ | 人生の中で経験すべき重要なライフイベントのひとつとして位置づけられる。 | 仕事、友人関係と並ぶ相対的なひとつの関係であり、他の価値や関係と拮抗した場合、退けられることもある。 | すでに日常の中であり、結婚に至る道程である。 恋愛期間は、専業主婦というあり方を可能にしてくれる男性を選別する期間でもある。 |
| 依拠する価値や制度体系 | 恋愛は、自己実現の手段であり、対象となる異性との関係の中で、全人格が完結するのが理想である。 | 男女共同参画を理念として支持し、専門技術の修得志向が強い。 | 近代核家族モデルを所与の前提とし、結婚後、特に子育ては母親が行うことを当然とする。 |
| 周辺の状況やライフヒストリーなど | 経済的にあまり余裕がない家庭の出身者が多く、家族に依存症を抱える者がいたり、本人が虐待や遺児など、サバイバーであることも珍しくない。 | ジェンダーを意識せずに過ごしてきた者が多く、いわゆる優等生タイプが多い。母親の半数以上はフルタイムで仕事を持っている。 | 比較的経済的なゆとりを享受してきた家庭の出身者が多く、母親の大多数が専業主婦である。 |

※1998年度～から現在に至るまでに関わった延べ約350名の学生たちのクラス内でのディスカッションや提出レポートの内容をもとに作成。

端から見ている限りにおいて、表3の第一群に属する女のこたちは、特別な個人との関係に没入するようであった。草柳（2004）は、このような自己の全人格を没入するような恋愛様式を70年代半ばの少女コミックの傾向から読みとり、これを「強い恋愛」と呼んでいる。そして、もはやこのような恋愛は90年代以降にはリアリティを持たない、としている。しかし、広告が打たれなくなっても未だに「SAY」が15万部発行されているように、70年代半ばの「おとめちっく」イデオロギー、すなわち自己の全存在を特定の他者に委ねる、という生き方が細々と生き残っていても不思議ではないだろう。さらにこの群の場合、様々な生育歴や周辺状況から、「(問題や被害の) 当事者」とか「マイノリティ」というラベルを付与される機会のある個人が多いことも、「あるがままの自分をすべて肯定してくれる誰か」への全面没入、という形を取りやすいのではないか。

次に、第二群を形成する女のこたちは、きわめて可視的である。彼女達の口からは、モデルとなる自分の家族や両親の関係、特に働いている母親についての肯定的感情が語られる事が多い。女性誌は立ち読みですませ、情報誌によってデジタルな情報だけを得られれば良しとする。セックスやセクシャリティについて語る事に違和感を持たない個人も多く、経済的自立を視野に入れた将来設計をしており、いわゆる「強い主張」が出来る人、自分の言説を「クレイム」として浮き立たせる術を心得ている人が多い。いわば、カミングアウトの時代であった日本の80年代～90年代半ばの運動実践スタイルを個人的関係に引き継いでいる群である。しかしこれもまた、21世紀の現在では、「女のこたち」としては、ある種のマイノリティであろう。

最後に、第三群を形成する「女のこたち」について考えてみたい。彼女たちは、「フツウの、今どきの」という形容を冠せられる層の厚い「女のこたち」なのである。数の上ではマジョリティであり、フェミニストからはあからさまに苛立ちのまなざしを向けられる存在でもある。「生き方」とは「着こなし」や「ファッション」と殆ど同義であり、恋愛は、第一群の人たちのように自身の

全存在をかけて獲得するものではなく、第二群の人たちのように理念を実践する場でもない。衣食住と同じように、今ここに、すでにある。今後については、母親が生きたように専業主婦として生きることが自分も可能だと信じているし、その可能性を満たす人かどうかが最終的な結婚相手の選別条件になるだけである。

3-2. 語らない主体と見えない問題経験

このような第三群の「女のコたち」は、まさに小倉千加子（2003）が描いてみせた「依存プラス自己実現コース」を選ぶ女性たち、と言えよう。小倉の指摘どおり、70年代から80年代にかけてフェミニズムが指向した方向とはかけ離れた地点に、今、マジョリティの女のコたちはいる。日常彼女たちの言動を見聞きしていると、「本当にうまく『女』への道を巡る人は、その道を選ぶのではなく、最初から「女」のままなのだ（小倉，前掲書，p.54）」ということが実感として理解できる。

彼女たちは何も語らない。近代以降、「語る」ということは社会運動の根本であり、人がより良く生きるために現状を変えていくには、語ることが唯一の一般的な方法であった（草柳，前掲書）。しかし、今、マジョリティの女のコたちは語らない。語りを強要するような運動論（=70～80年代フェミニズムもここに入るだろう）に出くわしてしまったときには、いちいち反論せずに、丁寧に聞いた上で、黙ってそれをサブカルチャーのひとつとして相対化してしまう。「ま、そういうのもあり、ですよね・・・」と。

そして社会の側も、マジョリティであり、問題経験を可視化しない彼女たちには語りかけない。カミングアウト全盛の日本の90年代、脚光をあびたのは「問題がある」と自己申告した人々であった。アルコールや薬物などの依存症、DVや虐待から自然災害や事故に至るまでさまざまな厄災の被害者であること、難病であること、そしてセクシャル・マイノリティであることなど、「世間にとって目新しい問題として提示出来る何か」を語る資格のある人々は「当

事者」として脚光を浴び、90年代の日本はさしずめクレイム申し立て実践の実験場のような様相を呈していた。

上記のような困難を抱える人々に対比して、平凡で幸せそうな女子学生は、耳目を集めるような「語るべき問題」を示さない。「そういう存在様式そのものが問題だ」と言われようとも、反論するつもりもない。こういう存在は、どう考えれば良いのだろうか。とりあえず「問題がない」し、そもそも数が多いのだから特に取り上げる必要もない、と言ってしまっても良いのだろうか。

良くはない。簡単に切り捨てる前に、なぜ、彼女たちが「語らない」のかを考えてみる必要があるだろう。草柳（前掲書）は、ひとびとが語るための二条件として、そのひとがリスクを背負う強い主体であることと、自分の主張を正当化するための価値の語彙（＝正義、自由、平等などがそれにあたる）を身につけていること、の二点を掲げている。しかし同時に、現在の日本社会が公民権運動やゲイ・ライツムーブメントに沸いた往時のアメリカと同じ条件ではない、ということも指摘している。すなわち、現代では個人の微細な問題を、強く明瞭なひとつの言葉で提示することが出来ないのである。個人の経験は常に、提示された一般的な「価値の言葉」とはズレる。価値の言葉が正当であればあるほど、個人の経験は「そう言われてしまうと、そうなんですけど、でも、ちょっと何となく・・・」というあたりに飲み込まれていく。マイノリティ対マジョリティ、被差別者対差別者という単純な二項対立図式も描きにくい。現に、「JJ」を讀んでいて着こなすとメイクに長けている屈託のない女子学生が、マイノリティではないとか、問題経験そのものがないなどと、誰が決めつけられるだろうか。草柳はこのような漠とした不全感を伴う語られない経験群を「曖昧な生きづらさ」と呼び、現代社会における個人の経験が、与えられた価値の言葉で規定しにくい社会であることに注目する。「それでいいんだけど何か違う」「あなたの言うとおりにだけじゃなくそれだけじゃない」という表明は、クレイムという形を取り得ない。しかし繰り返すが、クレイムが申し立てられないから問題がないわけではないのである。

筆者は、女性のエンパワーメントを考えた場合、マジョリティである「特に何も問題がない」ように過ごす女性の、不可視的で漠然とした生きづらさこそ、何らかの形で扱わなければならないと考えている。なぜならば、90年代を通して日本で盛り上がったクレーム申し立ての機運によって、マイノリティの問題はすでに社会問題化する手だてを得たからだ。今やセルフヘルプ・グループや当事者中心主義の運動から様々なNPOによる多様な援助活動にいたるまで、さまざまな異議申し立てを支えるネットワークが存在する。「あなたは何の当事者ですか？」と問うた時に、「女です」と答えられる人は、このどこかに居場所を見つける事が出来る。しかし「女であることを選んだのではなく、最初から女のまま」な多くの「女のコたち」には、マイノリティのポジションから脆弱さを武器に異議申し立てをする、という戦略は取れない。彼女たちは、どのように生き延びる手だてを得るのだろうか。

これは、主流な価値の中に埋もれている個人の「問題にもならない問題経験」を、どのようにすれば社会に媒介出来るのだろうか、という問いでもある。「女性のエンパワーメント」を言うとき、今後はこの点を考えなければならないのではないか。もっとも今言えることは、マジョリティの「女のコたち」には、「強い主体」を持って、と促したり、自身の訴えを正当化するために価値の語彙を身につけよ、と勧めることが、功を奏さないということだけなのだが⁽³⁾。

注：

- (1) 情報・カタログ誌においては、「彼と行きたい温泉ベスト10」のように、すべての特集トピックがランキング化されて掲載されるだけなので、今回データ抽出は行わなかった。
- (2) ちなみに、「JJ」のようなクラスマガジンの場合、大量の記事タイトルをヒットさせるためには、検索語に「着こなし」「コーデイネイト」「おしゃれ」と入力すれば良いのは言うまでもない。
- (3) かつてのさまざまな運動論が彼女たちに届かないのも、この「語ること」や「言葉の獲得」への強い志向が、違和感を生んだのだろう。

参考文献

草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会：クレイム申し立ての社会学』 世界思想社.

NHK 放送文化研究所編, 2004, 『現代日本人の意識構造 (第六版)』 日本放送出版協会

小倉千加子, 2003, 『結婚の条件』 朝日新聞社

日本雑誌協会 掲載各紙発行部数リスト

<http://www.j-magazine.or.jp/FIPP/FIPPJ/F/index.htm>

大宅壮一文庫 雑誌記事索引

<https://www.oya-bunko.com/cgi-bin/seek/serch.cgi>

Summary

Beyond the Claim-making Activities:

How Can We Empower Today's Young Women in Japan?

Keiko Yokota-Arita

Social movements like Feminism have decreased during the last decade. Especially, young women who seem to adapt to Japanese society are less committed to such activities than others. Besides, these women have few interests outside their ordinary lives. However, it doesn't mean that these women have had any problematic experiences.

The young women never take part in the Claim-making Activities because they have been annoyed by strong affirmation adopted by social movements during the past decade in Japan. We have to explore an alternative way to empower these women.